

学会開催報告

第56回秋季日本歯周病学会学術大会報告

準備委員長 奥田一博
歯周診断・再建学分野



平成25年9月21日(土)、22日(日)に群馬県の前橋市民文化会館および前橋テルサにて標記学術大会が本学歯周診断・再建学分野教授吉江弘正大会長のもとで開催された。

参加人数は、学術大会参加者総数2,600名、市民公開講座の参加者数378名を得た。

特別講演では Anton Sculean 氏 (ベルン大学) より “Contemporary concepts in regenerative periodontal therapy” と題して、骨縁下欠損および分岐部欠損の再生治療の生物学的意義と臨床コンセプトについて講演がなされた。

シンポジウム I では「サイトカイン治療 vs. 細胞治療」について4名のプレゼンターおよび2名のコメンテーターによるディスカッションが行われた。

サイトカイン治療の立場から北村正博氏 (大阪大) は FGF-2 製剤開発の現状について、二階堂雅彦氏 (東京都開業) は PDGF 製剤と凍結乾燥骨および人工骨を用いての骨縁下欠損および分岐部欠損の再生治療について発表された。細胞治療の立場から岩田隆紀氏 (東女医大) は、自己培養歯根膜シートを β -第三リン酸カルシウムとともに骨縁下欠損に応用し4例の移植と6か月予後について報告がされた。また、奥田一博 (新潟大) は、培養骨膜シートの骨原性特徴を細胞生化学的立場から詳述し、PRP とハイドロキシアパタイトとともに骨縁下欠損に応用し、5年経過してもその効果が安定していることを報告した。コメン

テーターからは、サイトカイン治療の適応症、細胞治療のコスト、インプラント治療との対比についてのコメントがあった。シンポジウム II では「歯周病とリウマチ」について Mark Bartold 氏 (アデレード大) より両疾患のメカニズムの共通性についての解説、宮坂信之氏 (東医歯大) より関節リウマチ治療の進歩について、伊藤聡氏 (新潟県立リウマチセンター) よりリウマチと歯周炎におけるサイトカイン標的療法の効果についての発表があった。シンポジウム III では「5 疾病と口腔ケア」について5名のシンポジストが登壇した。藤本篤士氏 (札幌西円山病院) の概説に始まり、三辺正人氏 (文教通り歯科クリニック) による糖尿病と口腔ケア、山本伸子氏 (大津市民病院) による急性心筋梗塞と口腔ケア、片倉朗氏 (東京歯大) による口腔機能管理はがん治療の支持療法であることについての説明、今井美季子氏 (わかさ竜間リハビリ病院) による脳卒中患者における歯科的対応、藤本篤士氏による認知症と口腔ケアについての発表があった。学会主導企画として「歯周病の予防戦略」について森田学 (岡大) からラ



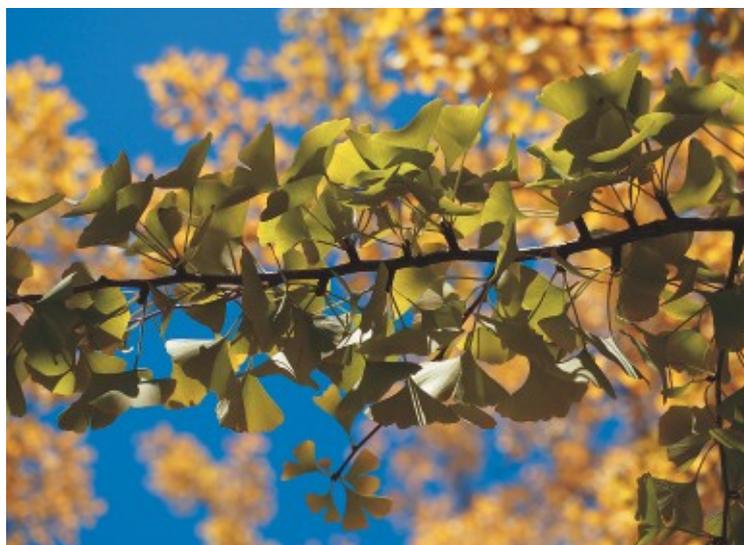
写真1：開会式での大会長吉江弘正教授の挨拶



写真2：ポスター会場での熱気溢れる討論風景

イフステージに応じた歯周病予防、伊藤博夫氏（徳島大）から公衆衛生視点から見た予防戦略についての発表があった。学会主導型研究として「糖尿病と心疾患」について稲垣幸司氏（愛院大）によるJDCP 研究報告、西村英紀氏（九大）と山崎和久氏（新潟大）による糖尿病、冠状動脈性心疾

患患者の重度歯周病の実態について報告があった。認定医・専門医教育講演では「インプラントの長期安定を目指して」のテーマのもと、荒木久生氏（明海大）からインプラント上部構造の咬合について、榎本紘昭氏（日本歯大）からインプラント修復における歯肉形態についての発表があった。歯科衛生士教育講演では大和雅之氏（東女医大）から細胞シート再生医療についての臨床応用の現状についての発表があった。前橋テルサで行われた市民公開講座では「口は大事！ー口腔から全身の健康に貢献するー」とのテーマのもと根岸明秀氏（群大）、五味暁憲氏（群大）から講演を頂戴した。この他にランチョンセミナー5題、ポスター発表153題が行われた。学会全体としてはどの会場も熱気のこもった発表が続き、大盛況のもと成功裏に終わった。



日本咀嚼学会第24回学術大会・ 日本顎口腔機能学会第51回学術大会報告

摂食・嚥下リハビリテーション学分野 堀 一 浩

平成25年10月5日(土)・6日(日)、日本咀嚼学会第24回学術大会(大会長:山田好秋教授)と日本顎口腔機能学会第51回学術大会(大会長:井上誠教授)が、チサンホテル&コンファレンスセンター新潟と新潟大学駅南キャンパスときめいとにて、合同開催として行われました。咀嚼学会は、咀嚼を中心として歯科関係者だけではなく食品分野の研究者や企業なども参加している学会であり、顎口腔機能学会は咀嚼機能だけではなく嚥下機能や顎運動など口腔機能をメインピックスとして扱っている学会です。食品側から咀嚼を考える、生体側から咀嚼を考えるという点で違った方面からアプローチを行っている両学会ですが、咀嚼という点では共通しているとのことと今回の合同開催に至りました。今回の合同開催では、日頃お世話になっている口腔生理学分野の先生方とともに主管させていただくこととなりました。

本学術大会では、両学会併せて300名超の参加者を得て、活発な議論をいただくことができました。特別講演として、本学農学部の大坪研一教授より「米粉および米粉利用の食品の機能性について」との題名でご講演をいただきました。新潟の特産である米はなぜおいしいのかを科学的な視点からわかりやすくご講演いただいただけでなく、新潟の農家の方たちの努力が伝わってくる非常に感銘を受けるご講演でした。

また、2日目には「咀嚼を中心とした多分野連携を考える」とテーマのもとで、シンポジウムが行われました。咀嚼学会の理事長である山田好秋教授、顎口腔機能学会の会長である東北大学佐々木啓一教授の他、工学分野からは顎口腔機能測定



を長年行っておられる本学工学部林豊彦教授、行政からは地域で食育についてとりくんでおられる塩尻市役所市民環境事業部健康づくり課上野保佐美先生、さらに食品企業からホリカフーズ株式会社の別府茂先生にそれぞれお話をいただきました。各先生方には短い時間の中で非常にわかりやすくそれぞれの立場からの視点、他分野との連携の模索についてお話しいただき、新たな分野との連携の可能性を見つけることができるシンポジウムとなりました。今回の様な合同開催だからこそできた企画であったと思います。

一般演題は口演・ポスターあわせて33題集まり、会場のあちこちでディスカッションが繰り広げられました。また、1日目夜には両学会合同の会員懇親会を催し、普段の学会では接する機会の無いような分野の先生方との懇親がはかられました。似たようなトピックを扱う学会は多いものの、それを別の視点から見ることで新たな気づきが得られることを体感した学会となりました。

最後となりましたが、今回の学会開催にあたりご尽力いただいた両学会事務局、チサンホテル伊勢様に感謝いたします。